虫ぼし抄

喜望峰植民地政府刊行物集成（マイクロフィルム版）

Government Publications Relating to the Cape of Good Hope, to 1910

Group 1 : Votes and Proceedings, Annexures and Select Committee Reports of the Cape House of Assembly and Legislative Council. 1854-1910.

Group 2 : Statistics Registers of the Cape of Good Hope, 1821-1909

北　川　勝　彦

関西大学図書館では、「英領アフリカ植民地政府刊行物集成」および「英領アフリカ植民地政府各省文書集成」をイギリス帝国・植民地社会経済史研究およびアフリカ社会経済史研究の重要な基本史料として重点的に収集してきた。現在、本図書館に収蔵されている「英領アフリカ植民地政府刊行物集成」としては、シェラレオネ、ゴールドコースト（ガーナ）、ナイジェリア、ケニア、ウガンダ、タンガニーカ（タンザニア）、北ローデシア（ザンビア）、南ローデシア（ジンバブウェ）、喜望峰（南アフリカ）の各史料が収蔵されている。また、「英領アフリカ植民地政府各省文書集成」としては、シェラレオネ、ゴールドコースト（英領トーゴランドを含む）、ナイジェリア（英領カメルーンを含む）、ケニア、ウガンダ、南ローデシアの各史料が収蔵されている[(1)]。

これらの史料のうちで英領ナイジェリアおよび英領ケニアの政府文書および各省文書については、『図書館フォーラム』の第5号（2000年）と第7号（2002年）ですでに紹介が行われている。本稿では、これまで南アフリカ社会経済史研究にかかわってきた筆者の関心に基づいて、関西大学図書館に収蔵され、利用可能となっている南アフリカの「喜望峰植民地政府刊行物集成」を紹介する。

南アフリカの植民地政府文書に関する書誌的研究

一般的に、政府刊行物は、政府機関の行政活動にかかわる文書として定義される。この文書には、南アフリカの政治史、社会史、経済史の展開を示す多くの記録が収められている。したがって、政府刊行物には、南アフリカ史の諸問題を多面的に解明するうえで貴重な情報が含まれており、政府刊行物がベストセラーになることは少ないとしても、それが史料として広く利用されないというようなことは惜しむべき事態である[(2)]。政府の刊行物は、その構成が複雑なために取り扱いにくいところがある。かつては南アフリカにおける政府刊行物に関する書誌的な研究状況もけっして満足のいくものではなかったが、今日では南アフリカ図書館情報学研究所（South African Institute for Librarianship and Information）の問題解決に向けた取組みによって事態も随分改善された。

さて、19世紀の南アフリカにおけるイギリス統治の状況は、南アフリカ事情に関してイギリスが行った膨大な調査報告に表れている。イギリスによるケープ植民地統治に関する記録は、この植民地政府文書に加えて、イギリス議会文書（*British Parliamentary Papers*, *BPP*）にも収蔵されている。1833～1899年の文書の一部は、フォード（P. & G. Ford）の編集を経て、IUP（Irish University Press）版*BPP*に収載され[(3)]、イギリス議会の下院（House of Commons）における討論の報告書や下院に提出された文書にも南アフリカ史研究のための夥しい数の資料が含まれている。南アフリカ史に関連した史料やブルーブックのチェックリストは、『ケンブリッジ版イギリス帝国史』（*Cambridge History of British Empire*）やウォーカー（E. A. Walker）の『南アフリカの歴史』（*History of South Africa*）などに掲載されてきた[(4)]。また、メンデルスゾーンの南アフリカ文献目録にも、政府刊行物リストの付録が収められている[(5)]。

現在では、南アフリカの植民地統治に関する数多くの文献目録、検索用リスト、ガイドブックが利用可能である。イギリス連邦の自治領の歴史研究に役立つ著名な資料ガイドとしては、アダム（M. I. Adam）の*Guide to the Principal Parliamentary Papers Relating to the Dominion, 1812–1910*があり、その中に南アフリカに関する文書目録が含まれている。本稿で紹介する喜望峰植民地政府刊行物集成については、そのガイドブックとしてムシカー

（N. Musiker）が編集し、1976年に出版された*The Guide to Cape of Good Hope Official Publications, 1854-1910*がある。なお、後に南アフリカ連邦を形成するオレンジ自由国の政府刊行物に関しては1975年にイールズ（M. Eales）が、*Annotated Guide to the Pre-Union Government Publications for the Orange Free State1854-1910*を刊行し、ウエッブ（C. de B. Webb）は、ナタール植民地政府記録の包括的な手引書を編集した。それに加えて、シュッテ（P. J. Schutte）は、連邦形成以前のトラスバール州政府刊行物の目録を編集している[6]。

1910年までのケープ植民地の歴史

アフリカ大陸の南西端がケープと名づけられたのは、それを最初に発見したポルトガル人によってであった。この植民地の基礎を築いたヤン・ヴァン・リーベック（Jan van Riebeck）は、オランダ東インド会社（VOC）に雇われていた。1652年、彼がテーブル湾の一角に上陸したとき、移住植民地の建設よりもオランダとアジアの間で交易しているオランダ船の薪水基地の建設を考えていた。彼の目的は、食糧穀物を栽培し、コイコイとの良好な交易関係を打ち立てることであった。しかし、1657年、テーブル・マウンティンの背後にある土地がオランダ人移民に割り当てられ、翌年には、最初の奴隷が導入された。それ以後、奴隷のコミュニティは植民地の人口の重要な構成要因となっていった。1659年、入植者とコイコイの遊牧民との間で最初の衝突が起こった。コイコイの中には内陸部に退いたものもいたが、白人の労働者となったものもいた。

18世紀初頭、入植者たちは主として南西ケープに定住していた。この地方の地中海性気候は、小麦とブドウの栽培に適していたからである。その後、次第に入植者の数が多くなり、オランダ人入植者は北や東へ移動し、内陸部に侵入していった。そこで彼らは広大な土地を利用して牧畜を営み始めた。自らの家畜の飼育と狩猟活動のために広大な土地を求めたボーア人の動きは、大いに植民地の領域を広げた。

先住民のサンとコイコイは、間歇的であるが白人の進出に対して抵抗したが、白人農場の農奴となる以外に道は無かった。1770年代末に、植民地の東の境はケープタウンから約600マイルの地点と定められた。この境界の西では、前進するボーア人はバンツー語を話す遊牧民に遭遇した。彼らは、1779年の最初のフロンティア戦争から1879年のアングロ・ズールー戦争に至るまで100年間にわたって衝突を繰り返したのである。

イギリスは、1795年にケープを占領した。ケープは1803年と1806年の間にバタビアの支配下に編入されたが、イギリスは1806年以降再び支配を確立する。19世紀にはケープは2倍の大きさとなった。1847年に北の境界はオレンジ川まで広げられ、19世紀後半には辺境地の直轄植民地はケープに編入された。たとえば、1866年にはイギリス領カフラリア、1880年にはグリカランドウエスト、1895年にはベチュアナランドがケープに併合された。バストランドは1871年に併合されたが、1884年にイギリス政府の直接支配下に置かれている。

1880年代までケープは南部アフリカでもっともパワーのある植民地国家であった。しかし、その後、政治と経済の中心は、金の豊富なトランスバールに移っていった。南アフリカ（トランスバール）共和国はアングロ・ボーア戦争（1899－1902年）に敗れたが、その後すぐにパワーを取り戻し、その代表政府は南アフリカ全土の行方にかかわる論争―とりわけアフリカ人の選挙権問題―の主導権を握った。1910年に連邦に加盟したケープの政治的影響力はトランスバールに一歩譲り、ウイットウォーターズランドこそが南アフリカ連邦経済の牽引力となっていったのである[7]。

ケープ植民地政府文書を通してみた南アフリカ史研究の課題

このようなケープ植民地の歴史を研究する上で重要な史料が「喜望峰植民地政府刊行物集成」である。ケープ植民地に関する政府刊行物は次の四つのものからなりたっている。すなわち、Votes and Proceedings of Cape Parliament and their Annexures 1854～1910年）、Cape Statistical Blue Books（1652～1910年）、Statutes of Cape Colony（1652～1901年）、Parliamentary Debates（1884年以降Hansardとして刊行）である[8]。

19世紀全般にわたって、ケープ植民地は、アフリカ大陸のイギリス植民地の中では戦略的にもっとも重要な位置にあり、移民の人口も多く、経済的にも豊かであった。したがって、利用可能な政府文書

の量は、この時期のアフリカ大陸の他の植民地を圧倒していた。この政府文書は、今日に至るまで歴史家の間で十分利用しつくされていない貴重な史料である。

ケープ植民地は、その政治体制の発展において19世紀のイギリスの他の移住植民地―たとえばカナダ―のパターンをほぼ踏襲した。しかし、ケープの人種構成と地理的拡大は、政治体制の発展を特異なものとした。19世紀の植民地政府刊行物は、文字通り統治機構の確立過程の記録であり、植民地国家の活動を映し出しており、中央および地方の行政機関の設置過程や立法過程を概観でき、さらに植民地国家の主要な介入分野を観察できるものである。

たとえば、1853年、ケープ植民地の入植者は、10年以上にわたるイギリス本国との激しい闘いの後に、ようやく自らの政治体制を前進させるための代表政府（representative government）の承認を得た。その結果、統治機構は、行政機関（Executive Council）と立法機関にあたる二院制の議会で構成された。議会の「上院」（Upper House ）は15名からなり、主席判事が座長を勤め、「下院」（House of Assembly）は46名のメンバーからなり、議長（Speaker）が選出される。選挙資格を得るには、12ヶ月にわたって25ポンドの価値を有する資産（土地）を占有しているか、50ポンドの給料を得ているという条件が定められた。この資格基準はイギリスと比較すれば低かったが、肌の色に関係なく適用されたところにケープの特徴があった。

1872年には、ケープに責任政府（responsible government）が承認され、憲法改正法（Constitution Amendment Act）の下で、立法・行政の両機関は議会のメンバーによって運営されるようになった。ケープには、続く10年間に政党は現れなかったが、アフリカーンス語を話す農民の代表としてアフリカーナ・ボンド（Afrikaner Bond）が台頭した。ケープ植民地が拡大していくにつれて官僚機構の整備が必要となった。アフリカ人の領土の併合に関しては、彼らの政治上の地位をどのように定めるかが常に問題となった。

ケープ植民地経済の建設と維持に関する植民地政府の取組みも重要課題である。植民地政府は、本国から常に財政面での自立を求められたが、ケープ植民地についても例外ではなかった。そのためには植民地における税制の基盤整備が必要で、土地と資産の所有に関する法的措置が講じられることになった。それに加えて、植民地経済を支える諸産業には熟練労働だけではなく、不熟練の低賃金労働をどのように調達するか、すなわち労働力の確保こそが最重要課題であった。さらに、本国と植民地間それに植民地内部で人、商品、資金、情報をスムーズに移動できるインフラストラクチャーの建設は、植民地経営にとって欠くことのできないものである。このように、植民地政府文書を用いることで解明すべき多くの課題があることが知られる。

19世紀末には、ケープ植民地と周辺の関係が複雑化する。1870年代には南部アフリカ諸領を統合するイギリスの計画を巡って複雑な国際関係の動きが見られた。1880年代には、ドイツがこの地域に介入してきたこと、それにウイットウォーターズランドでの金鉱の発見にともなってトランスバールが台頭してきたこと、これらが英独関係やトランスバール政府とイギリス系住民の利害の衝突を招き、1895年のジェームソン侵略事件や南アフリカ戦争を引き起こした。戦後、南アフリカにおける新しい政治経済への挑戦の中で、1910年に南アフリカ連邦が成立する。このような南アフリカ政治経済史の重要な側面は、この大部な政府刊行物集成が如実に物語っている。議会での論争や通信文、調査委員会の報告などが多種多様な文書類に収められている。

19世紀初期のケープには、イギリスの支配当局は、ケープをイギリス人の定住する典型的な植民地であるかのように考え、この土地に暮らす異質な人々の集合体のガバナンスに着手した。振り返ってみれば、資本主義と議会制民主主義が発展してきたイギリス本国の規範を著しく異なるアフリカの社会秩序に押し付けようというイギリス帝国の決定は多方面に重大な結果をもたらした。その行動の基本は、19世紀のビクトリア朝時代の帝国の利害と一致させようとするものであった。自治植民地は白人入植者の支配下にあり、移民たちはその植民地経済がイギリス経済に依存することを容認し、彼らの利害とイギリス帝国の利害の間でほとんど矛盾はないと見ていた。しかし、実際には入植者間および植民地と帝国の間での利害対立は、植民地政治の重要課題となる。植民地国家は、本国と植民地の生産力を支える諸要因の連関と植民地内部の複雑で異質な社会形態の両方にまたがっている。経済と政治の再生産の手段として植民地政府の役割とその相対的自立性は、植民地内の対立と植民地と本国の間の対立の観点から分析されるべきである。このようなケープ植民地国家の

分析にとって、19 世紀の植民地政府の文書記録は驚くほどの豊かな挙証を提供してくれる。

注

（1）「英領アフリカ植民地政府刊行物集成」としては、Sierra Leone（1808–1961 119 reels）Gold Coast（1846–1957 151 reels）Nigeria（1868–1960 178 reels）Kenya（including those relating to the East African High Commission and East African Common Services Organization, 1897–1963 134 reels）Uganda（1900–1962 62 reels）Tanganyika（1919–1963 78 reels）Northern Rhodesia（1890–1963 75 reels）Southern Rhodesia（1890–1963 113 reels）The Cape of Good Hope to 1910 Part 1: Votes and Proceedings, Annexures, and Select Committee Reports of the Cape House of Assembly and Legislative Council（1854–1910 285 reels）Part 2 : Statistical Registers（1821–1909 47 reels）Sierra Leone（1893–1961 42 reels）Gold Coast and British Togoland（1843–195 110 reels）があり、「英領アフリカ植民地政府各省文書集成」としては、Nigeria and British Cameroons（1887–1960 173 reels）Kenya and the East African High Commission（1903–1963 119 reels）Uganda（1903–1961 68 reels）Southern Rhodesia（1897–1980 113 reels）がある。

（2） Reuben Musiker, *South African Bibliography : A Survey of Bibliographies and Bibliographical Work,* Third Ed., Mansell, London, 1995.

（3） 本シリーズは、全巻関西大学図書館に収蔵されている。植民地期のアフリカに関する重要な文書は、そのうちの70巻にまとめられた。

（4） E. A. Walker ed., *The Cambridge History of the British Empire: South Africa, Rhodesia and the High Commission territories*, Vol.8, 2nd ed., Cambridge, 1963. E.A.Walker, *A History of South Africa*, 3rd ed., Longman, London, 1957.

（5） S. Mendelssohn, *South African Bibliography*, London, Kegan Paul, 1910, reprinted , London, Holland Press, 1957, 1968. 2vols.

（6） M.I. Adam, *Guide to the Principal Parliamentary Papers Relating to the Dominion, 1812–1910*, Edinburgh, Oliver and Boyd, 1913. N. Musiker, *The Guide to Cape of Good Hope Official Publications, 1854*–1910, Boston, Hall, 1976. C. de B. Webb, *Guide to the Official Records of the Colony of Natal,* 3rd ed., Compiled by Jennifer Verbeek, Mary Nathanson and Elaine Peel, Pietermaritzburg, University of Natal Press, 1984. P.J. Schutte, *Beredeneerde Gesamtlike Katalogus van Groenboeke van die Suid-Afrikaanse Republiek*, Pretoria, State Library, 1966.

（7） N. Worden, *The Making of Modern South Africa : Conquest, Apartheid, Democracy,* Blakwell, Oxford, Fourth ed., 2007.

（8） 本マイクロフィルム史料については、以下の索引を参照できる。Government Publications relating to the Cape of Good Hope, to 1910; Group1: Votes and Proceedings, Annexures and Select Committee Reports of the Cape House of Assembly and Legislative Council. 1854–1910, Group 2 : Statistics Registers of the Cape of Good Hope, 1821–1909 : Index to the microfilm, Microfilm Academic Publishers, 1980.

（きたがわ　かつひこ　経済学部教授）